

いつの日か思い出すことがあった。そのことは何気ない毎日の中に密んでいて、綺麗な星を思い出すようなそんな小さな頃合いを見せて、笑っているのだから。いつしかそれは私の希望となつて、そしてこれから生きていく。隣り合わせに座っている希望の隣にはいつも絶望が泣いている。知っているのは誰にでも伝わってしまうのだから、人というものは不思議な生き物と考えてしまうのはどうしてだろう。どこにでもいるのは誰かが教えてくれて、人のことを伝えてくれたのは紛れもない自分だということに落ち着く。何を考えているのがわかる顔つきで彼女は私に向かって何度も訴えた言葉。「その時になつたらわかるから」と何度も何度も。

私のことを考えている人を突然のように思い出して、どうしてもと答えた、私はどこで道の間違ったのが今でもわからない。自分のしたいことぐらいあつて当たり前。だからなぜ、あのとき、自分のことを信じていたあの人を信じられなかったのだろう。私にはわからず、そしてわかつたところで無益なのだと考えてしまつても仕方のないことなのかもしれない。いずれ私は知ってしまうのだろう。この世界の崩壊が、誰もが唱える終末論を私は無視しているけど、現実是非情。

世界は壊れる。そして再生の余地はないのだと。

その中で私は何をしようとしているのだろう。ずっと言葉に尽くした人々を馬鹿にすること
も大変なんだろう。

寂れた街路の中、私は一人でそんなことをずっと考えてしまっていて、私だけの世界を創つ

ているのはどうして、こんなところで、と。私の意見は聞かれた覚えがなくて、だけど毎日の中で彼女と出会ってしまったことが今でも楽しみの一つになるなんて思いもしなかった。たった一つの想いがこの世界から消えることのなかったことは街路にある小石のような存在のように、生き物なんて何もできない、神に近い何かに私は想いを寄せるしかないのだと気づいたし、それから、彼女と出会ったことを小物入れの中に存在させているのが私にとって何もかもを思い出しているのが知っていたのが今でも悔しくて空を見上げると、そこには綺麗な言葉を並べ立てた、ある石碑が浮かんでいた。私は特に驚くことなく、そこから彼女が出てきたのが嬉しくて、ゆっくりロープが垂れ下がっていて、それに彼女が私を見て微笑みながらする降りてくる。

ジャケットの赤色が私の瞳と同じで、何も教えてくれなかった秘密をどこで知ったのかを思い出せずにいたその頃を未だかつて私に思い出せてくれなかった。私は私でいろいろと勉強になつたのだと、彼女に後に述べた。

そして彼女は私に挨拶して、キスを愛用の剣に投げていて、答えた。
久しぶり、と――。

「君の笑顔」

何も無い空間に答えが存在しているのかと、私の心はひどく閉じてしまっている。綺麗事さえいわなければ成立しているはずで、答えもそこには何も無いのだと知ったら、それはそれでおかしなことでもあるのだろう。四次元のように世界は成り立っているが、五次元の存在は欠片とも想いが重ならないのはなぜだろうと、教えてもらっても世界は何を知っているのか、今でもわからない。

いつものように旅をしているとそんなことを思つて暇つぶしをしていると、彼女が私の近くでのんびりとジュースを飲んでいるのだから、私は私でいられるのなら、今のうちに全てを言つておこうと思つてしまつても、別におかしなことではなく、面白いことを風に流して笑つていられるのなら、いつものように涙を流しているのがなぜか楽しく感じられるのはいいだろう。私の残されているのは彼女の存在と私の心と元氣になった形を知っているのだから、それでも楽しんでいられるのがやはりおかしいことなのだろうか。

「どうしたの」

彼女は私の瞳を覗き込む。綺麗な瞳に何を映せばいいのかわからないそんな表情だった。

彩ある世界

鮮やかに輝く

煌めきはいつも

笑っている

階段に座って彼女と話すがとても楽しいと記憶している。どこで見たのかもわからない世界のことも難なく彼女に話せたのはこれが初めてじゃない気がして、それが非常に愉快だった。私の欠落した答えを私に頂戴してくれたのが嬉しくて、どこか遠い国のことを憩うことが私の故郷を知っている人なんだなど、どうしてか、そんなことを思っていた。たった一つの一人の世界のことを考えていた私のことを、どこで教えてくれたのかはわからないが、彼女なら確かにノーゲームな話であり、この世界からのことを始めて思ったりしてしまうのだろうか。私には何も残されていないけれど、私の目の前で突然と降り止んだ雨はまたしても雨戸を叩いていて、綺麗な掛け声が私をまた教えてくれたのは輝いている世界のことなんだろうと、思っても何ら変わりはないのだから。私の世界。それがこれからの旅立ちの日。

「ほら、目の前にあるじゃない、綺麗な星屑が。その星、私の気持ちを作ってくれたんだから」「そうなんだ。綺麗な宝物がそこにあるって言っているような、ないって言ってたような」

綺麗に輝く雨宿り。何気なく揃っている、雨の叩くりズムは曲を教えてくれているようなそんな楽しみを教えてくれた。私の心に動しんで運んでいる、手荷物を私だけのことにしてほしいと馬車は連なって、通っていく。ここは違う世界なのか、今のは妖精なのか。私にはまだわからない。

綺麗な星が輝いているのは間違いないだろうけど。それでも自分の最後を看取っていたもう一人の自分がささやいている。

もう大丈夫だよ――。

一人でいられるのがもうなくなつたことが嬉しくてどこか遠い世界を思わせてくれるのが嬉しくて。私は涙を流す。世界の新しい中心地にいるのが自分だけなんて、思えなかった。私は私だけの世界を知つた。

遠いところから爆音が鳴る。

それは果たして私の心が壊れた音か、それとも世界の全てが壊れた音か。

「さあ、行こう」

彼女の手につ張られて、私はそのまま雨の中歩いていく。

君の笑顔が輝いていると言われた頃のあの人の元へと行くのはそう遠くない日なんだと、確かに思ったのだ。

ひたすら考えて
想っていた

その人の元へと行くのなら

泣いているのに

笑っているのに

それでも

世界は変わらない

それが最後の答えだと

どうして知り得ようか